
魔法少女リリカルなのは～悪を目指す者～

ユニコーンデストロイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悪を目指す者〜

【Nコード】

N4488Y

【作者名】

ユニコーンデストロイ

【あらすじ】

ある男が悪をなすために魔法少女リリカルなのはの世界に転生した。さあ！その悪しき力を持って全てを破壊せよ！

この作品は悪役がメインの作品です。なのでそうゆうのが苦手な方は戻るボタン押してください

第1話 悪の誕生（前書き）

今度は悪役がメイン主人公です。頑張って投稿するお！

第1話 悪の誕生

俺の名は小林将大。^{いばやしまさひろ}普通に高等学校に通うただの学生だ。俺は今、喧嘩をしている。校内で実力No.1を決めるとか言う下らない抗争に巻き込まれた。

「テメエ……ふざけんなよ？俺の貴重な時間を何でテメエみてえなカスに削がれなきゃならねえんだよ……ぶっ殺すぞ！」
丁度俺が昼飯を食って寝ようとした時に一年のガキ共が俺を名指しで喧嘩を吹っ掛けて来やがった。

「テメエ……俺の睡眠時間を潰した罪は重いぞ……覚悟しやがれ！」
そして俺はその一年達に殴りかかった。

十分位が過ぎた頃には相手の数は3分の1になっていた。俺は残りの奴等を潰すべく、駆け足で突っ込んだ。
だが……ここで予想外の出来事が起こった。
倒れ伏していた一人が立ち上がり、俺に体当たりをした。
俺は駆けていた為に避けたり止まったりすることが出来ずにそいつの体当たりをもらって受けてしまい、俺は……窓から転落した。

俺の学校では学年が上がるとどんどん上の階に行くんだが俺のクラスは運が悪いことに四階にあった。俺は頭からまっ逆さまに落下して行き、地面に激突した。
その瞬間、俺の意識は途絶えてしまった。

ん？何で意識が在るんだ？俺は確か一年坊にタックルされて窓から付き落とされたのに？まさか奇跡的に助かったのか？

『残念ながら違う。君はすでに死んでいる』

突然声が響いてきた。俺は怒鳴り散らしながら声の元凶を探した。

「おい！今の声誰だ！隠れてねえで出てこいや！」

すると先程声を出していたであろう黒いシャツに黒いズボンを履いた男が居た。しかもソイツの背中にはデカイ鎌を背負っていた。あの鎌……… ゆうに3m50？位あんだろ……… あんなもん背中に背負っていやがるなんて………

俺は得体の知れない相手にドスの効いた声で話す。

「お前は………何者だ。それとここは何処だ！」

俺の一番気になる問いを黒ずくめの男に聞いた。

『一応名乗っておこう。私の名はハデス。この冥界の地を統べる王だ。そしてここは冥界だ。』

冥界……………ハデス……………そうゆうことかい。

「やはり、不良は地獄送りってか。さつとしろ。俺に罰を与えに来たんだろ？」

『残念ながら違うさ。私が君をここに連れてきたのは私を楽しませて欲しいからだ。』

はあ？何言つてんだ？楽しませるだと？

「それはつまり、俺をここに呼んだのはお前を楽しませるために貴様のマリオネット（操り人形）になれってか？」

『まあ言い方はあれだが大体そんなとき。』

冥界の王ハデスは不敵に笑いながらそう言った。

「じゃあ何すればいいんだよ。さつと言いやがれ」

『ふむ。君のような感じの奴は大概喰って掛かるが君はそんな事をしないんだね』

「俺は好きであんな喧嘩ばっかやってたわけじゃねえよ。売られたから買ってただけだ。それより早く用件言えよ」

俺は冥界の王ハデスに内容を喋るように急かした。

『分かった。内容は……………最近あちこちの神が自身で見出した人間を漫画やアニメの世界に転生させているんだが……………何処の

奴も皆、バットエンドが嫌だから本来救われない者を救ったり、ハーレムを作ったりと善をしたりしかないんだよ。だが私はあることを思い付いた。それなら私自身が悪を遂行出来そうな奴を送れば良いじゃないかと思い付き、君にその悪役をやらせようと思い、君をここに連れてきたと言うわけさ」

ほう…………アニメの世界での悪役か…………

「面白そうじゃねえか。やってやるよ。行く世界は何処だ？」

『君に言ってもらう世界は一番転生者が行きたがる 魔法少女リリカルなのは と言う世界さ』

魔法少女リリカルなのは…………確か前にアニメ好きのダチに無理矢理貸されて見たことあんな…………面白くなかったがな。話し合いで友達とか…………下らねえなと思ったな。

『さて次に君の能力とスペックだが、君には身体能力MAXと魔力SSS+、能力には仮面ライダーと言う特撮に出てくるアナザーアギトと王蛇とうライダーになれる力、そしてデバイスを渡そう。ああそうそう、もうひとつはこの武器や力を完璧に扱えるように君の頭に情報として入れよう』

何かスゴそうだな

「そのデバイスは起動すると何になるんだ？」

『このデバイスは起動させると狗爪のような武器になる。名前は向こうで付けてあげてくれ。それではそろそろ向こうに送ろう』

「分かったよ。何処から行けばいいんだ？」

俺はハデスに何処に行けば良いか聞くとハデスは無言で俺の背後に指を指した。

そこには嚴重に鎖で縛られ、あちこちに人の足や腕、頭が生えていて真ん中の中央の上には大量の髑髏が幾重にも積まれていた。

俺がその扉を観察していると不意にその扉の鎖がほどけ、人のうめき声みたいな音を立てながら扉が開いた

『さあ、行け。その世界に黒き悪の種を……悲しみを、絶望を振り撒けてこい』

「ああ！やってやろうじゃないか！こんな楽しいこと、放っておけるほど出来ちゃいねえからな！」

俺はいまだにうめき声の上がっている扉に向かって歩き出した。

『一応言っておくが向こうに行ったら今の名前は使えんからな。新しい名前を名乗っておけ』

俺はハデスの言葉に耳を傾けるが返事をせずに頷くだけにして扉に入った。

俺が入った瞬間、扉は勢い良く閉まり、鎖がジャララと物凄い速さで巻き付き、あっという間に扉を開かないようにした。

『さあ……私のマリオネットは何処まで悪をなすのだろうか………
…楽しみだ』

第2話 悪の使者（前書き）

今回、将大のリリカルなのはの世界での名前が明らかになります

第2話 悪の使者

俺はいまだにあの扉の中の道を歩いている。

「てか何時着くんだよ。そろそろ休みてえんだがな……………」

まあこんな空間に一人で歩いていれば楽しくないからこうなるのは当たり前か…………誰か話し相手が欲しいな

《我が主よ。何時まで黙っているつもりだ？そろそろ我に真名を与えてはくれぬか？》

すると俺のデバイス……………待機状態は髑髏のマークの入ったガントレットが話し掛けてきた。

「そおいやお前がいたな。良いぞ。お前に名を与えてやるよ。そおだな……………よし、お前の名は呼称、ヘル……………正式名はヘル・カラミティだ。」

《認証登録を開始。呼称、ヘル。真名、ヘル・カラミティ……………登録を完了。これからよろしく頼む。お館殿》

良いねえ……………この古風なしゃべり方は。声も渋いおじさんの声だな。

「そおいやヘル。この道はあとどれ位で着くんだ？」

《あと一刻程で到着する。》

ヘルと他愛のない会話をしていると光が見えてきた。

「あれが出口か？」

《そうだ。お館殿よ》

俺の問いにヘルは軽く返す。

さあ……………あのリリカルなのは世界に絶望と悲しみをもたらしてやろう！

俺は嬉々とした足取りでその光を抜けた。

光を抜けるとそこは深夜の公園だった。俺はその公園の名前を確認しに行った。

「鳴滝臨海公園……………」

無事にこのリリカルなのは世界にこれたようだな。

さて……………これからまずどうしようかね。拠点も探さないとな。

「さてヘルよ。まずはどうしようかね……………」

《ハデス殿がお館殿を原作の始まる三十分前に送っている。然らば後はお館殿の判断にお任せ致す》

そうかそうか……

「ならヘルよ。今から原作の開始する動物病院に案内できっか？」

《了解つかまった。まずはセットアップの方をして下され》

「おう。セットアップ」

俺は服のイメージを固めながら言った。確か初期起動時に自分の考えた服をバリアジャケットに出来たはずだからな。

そうしてデバイスから黒い光が発現し俺の体を黒い光と黒い稲妻が覆う。

光がおさまるとそこには黒い服に黒いズボン、黒いロングコートを纏い、顔にはピエロのような仮面がついている。そして手には凶悪な鋭い刃を光らせている小豆色の狗爪が装着された。

「もしも介入出来そうなら介入してジュエルシードを頂いていこう」

《あいわかった》

俺はその場から飛び立ち、ヘルナビにより鳴滝動物病院に向かった。

鳴滝動物病院に着くと幼い少女と少年、それとフェレットみたいな

のがいた。

「ほう………この世界には他に転生者がいるのか？」

俺はヘルに聞いてみた。

《その通りだお館殿よ。このリリカルなのはの世界は希望者が一番多い為に一つの世界に複数の転生者が送られておる》

くくくく………更に楽しくなってきたな。

「さて………一時傍観していようかね」

俺はなのはおぼしき少女と少年の事を一時、観察することにした

俺の名は前橋翔………転生者だ。俺はテンプレ通りの転生トラックに引かれてしまい、神に暇潰しのために転生しろと言われて転生した。最初は俺も転生イベントキターー（・・）と喜んだがいざ転生すると赤ちゃんから始まってしまい、とても辛い幼少期を過ごした。止めて聞かないで！あれは黒歴史どころじゃない！と軽く脱線したがとにかくテンプレ通りに進んでいった。家は翠屋のお隣さんで親は普通の一般人。デバイスは学校から帰ると俺の机の上に手紙と一緒に置いてあった。神からの手紙で内容はこのデバイスを持った瞬間に君が願った魔力と身体能力が解放されると書いてあった。

ちなみに俺が願ったのは多目の魔力と強い体だ。デバイスを渡されたのが今起こっているなのは魔法に会うイベントが始まる1週間前だったんだけどね。

それはそうとこの邪悪な思念体は実際に見ると気持ち悪いな。後ろから出てる触手みたいなのはずっとうねってるし、体はゆらゆら揺れてるし……………

「唱えて……………魔法の力を……………大いなる力を！」

今喋っていたのは言わずもながらユーノ。

「魔法の……………力……………」

そして今喋ったのが愛しの少女、高町なのは。

「僕の言葉に続けて！我、使命を受けし者なり……………」

「わ…我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「け、契約のもと…その力を解き放て」

「風は空に、星は天に……………」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心はこの胸に……………」

「……………この手に魔法を……………」

「レイジングハート！セエーツト、アーーーーップ！」

なのはの体から光が発光する。そしてその光が収まると白い羽が舞い散る中に現れた白き天使のような少女が現れる。手には丸いいかにもなステッキが握られていた。

「凄い……何て魔力の量何だ………」

フレット……もとい、ユーノがなのはの内にある魔力の量に驚いていた。

「……て……ふえええええ？！何か服が変わっちゃったよ？！え？！えええええ！！」

いやいや、なのはさん……驚きすぎですよ……

「なのは……少し落ち着こうぜ？な？」

俺はなのはの肩に手を置いて動きを制限させ、落ち着かせた。

「大丈夫か？」

「う……うん。もう大丈夫だと思う……」

うむ。なのはも落ち着いたようだし、早速目の前の敵を仕留めるか。

「なのはは封印の準備を頼む。俺は奴を引き付けながら弱らせるから」

「わっ……分かったの！フレットさん！封印でどうすれば良いの！」

なのはがユーノに封印の仕方を教わっている間に俺はあのうねうねした思念体に攻撃をする。

俺のデバイスは剣にリボルバーのついた俗にいう、パイルバンカーの形をしている。俺は思念体に近づき、刃の部分で奴の触手部分を切り裂く。切り裂いたことにより、思念体が狼狽えた。俺はその隙を見逃さず、奴の体に先端に付いている杭を打ち付ける。

「オツシャアア！行くぜ！」

《デストロイ・ブリンガー》

俺のデバイスから女性の声が聞こえてくる。

「総てを貫け！デストロイ・ブリンガーアアアアアア！！」

俺のデバイス：ファルシオンから凄まじい爆音を放ちながら思念体の体を粉碎する。

「今だなのは！封印だ！」

俺は声を張り上げ、なのはに合図を出した。

「リリカルマジカル、封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシールド！」

「ジュエルシールド！封印！」

《シーリング・モード、セットアップ》

「リリカルマジカル、ジュエルシード…シリアル???！封印！」

ジュエルシードが封印され、空中を漂っている。
俺はなのはの元に寄った。

「お疲れ様、なのは」

「っ……疲れたの〜」

なのはがそう言いながら地面にへたりこんだ。

「すみません。ジュエルシードにレイジングハートを向けてください」

ユーノがなのはにジュエルシードにレイジングハートを向けるように指示を出す。

「うん……分かったの」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けようとした時、俺達の間を一陣の強めの風が通り抜けた。砂ぼこりが舞ったため、俺達皆は目を瞑った。そして風が去り、目を開けるとさっきまで目の前にあったジュエルシードが消えていた。

「あれ？ジュエルシードは何処行っただの？」

なのはが辺りを探し出す。俺とユーノも一緒に探そうとした瞬間、何処からか笑い声が聞こえてきた。

まさかこんなに簡単に奪えるとはな……はじめにしてはいい感じだね。

「クククククッ……ジュエルシード、シリアル???は頂いていくよ」

なのはとおぼしき少女は状況がうまく理解できないのかおろおろし、横にいる少年は俺に向かって睨みを聞かしている。すると先に声を上げたのはフェレットだった。

「それを返してください！それはとても危険な物なんです！」

俺は原作組がジュエルシードを封印するまでの間に描いたシナリオを言った。

「残念ながら返せないぜ。せつかくこのジュエルシードが積んであった船を攻撃したのに、攻撃の余波でジュエルシードがこの世界に落下……ようやく1つを見付けたのだ。返すはずはない」

俺がそう言つと少年が怒声上げながら聞いてきた。

「貴様！そのジュエルシードをどうするつもりだ！」

クククッ予想通りの言葉が来たな。

「単純明快にして分かりやすいぜ？ ジュエルシードを使って全世界に悲しみと絶望を振り撒くのさ！」

俺がそう言った瞬間、少年が自身のデバイスであろうパイルバンカーを俺に向けて斬りつけてくる。

だが俺は少年の斬撃を狗爪で受け止める。少年が驚いた表情を見せる。

「残念だったな。確かに力はあるが技術が全く無いな。力押しで勝てる相手だと思わん事だな！ 少年！」

俺は少年の武器を弾き、空いたボディに蹴りを叩き付けた。少年は痛みに悶えながら地面に体を打ち付けた。

「翔君！！」

なのはが翔の元に駆け付ける。痛みに悶えている翔を介抱しているとなのはが将大の方を見ながら話始めた。

「あなたは何者何ですか！ どうしてこんな酷いことするんですか！」

「俺の名はネロ、ネロ・カオス。世界に混沌と破壊、悲しみに絶望を振り撒く者。そしてもうひとつの答えだがそいつがいきなり斬りかかって来たから対処したまでさ。まあ今日はほんの挨拶代わりさ。もしかしたらちよくちよく君達からジュエルシードを奪いに来るかもな。その時はよろしく。」

俺はそう言うとその場を離れた。少年と少女とフェレットは俺に怒りの視線を向けてくるが初戦闘に疲労に怪我があるため、少年等はその場から動かず、ただただ俺のいた場所を睨み付けるだけだった。

てかこの感覚良いねえ。蝶最高だぜえ！

第2話 悪の使者（後書き）

ちよくちよく頑張るお！

皆様の感想が私、ユニコーンデストロイの餌であり、原動力です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4488y/>

魔法少女リリカルなのは～悪を目指す者～

2011年11月17日19時58分発行